

命を守る災害情報 今何ができるのか 今何をすべきか



NHK和歌山放送局 局長

仲山 友章

南海トラフを震源とする巨大地震、向こう30年の間に発生する確率は70パーセントと発表されています。70パーセントという数字は、置き換えますと明日起きてもおかしくないという意味です。和歌山県の想定では、震度7の激しい揺れと直後に沿岸部に襲来する10メートルを超える大津波で人口の1割近い9万人が犠牲になると見られています。阪神・淡路大震災、東日本大震災、そして去年の熊本地震など毎年のように発生する大地震を経験してきた私たちは、甚大な被害が予想される南海トラフの巨大地震にどう立ち向かい、どう備えるのか。NHK和歌山放送局では、毎日のニュース・番組・様々なイベントなどを通じて、防災・災害情報を発信しています。助かるはずの命、助かった命、そして助けないといけない全ての命を守るために、私たちの取り組みを通じて考えて頂ければと思います。

BOSA I

「防災」「ぼうさい」「ボウサイ」「BOSA I」色々な表現があります。NHK和歌山放送局ではイベントやグッズのロゴにローマ字の「BOSA I」を使っています。「TSUNAMI」のように、国際的に通用する言葉になることを願ってのことです。

県民の皆さんにBOSA I・防災への意識を高めてもらうため、地域放送を通じて様々な活動を行っています。その一つが「守るプロジェクト」です。「災害からひとりの犠牲者も出さない」ことを目指し、「報道」「番組」「イベント」でBOSA Iを展開しています。

1 報道

具体的な事例をご紹介します。まず、報道についてです。平日の夕方6時30分から放送しているニュース情報番組「あすのWA!」で、毎日必ず防災のノウハウや課題、地域の取り組みなどを紹介しています。

災害時に情報収集に役立つラジオの活用普及

を目指して月に1回「ラジオ防災講座」（夕方6時～6時50分・第一金曜日）を放送しています。和歌山県内に4つあるコミュニティFM局と共同制作し、県内だけでなく全国の最先端の取り組みをご紹介します。また、和歌山が提唱した11月5日の世界津波の日には、過去に大きな津波被害にあったインドネシアやチリとも結んで特集番組を放送しています。

また、台風などの非常災害時には、ニュース・番組で最新の情報をお伝えするとともに、逆L字放送、データ放送、ホームページ、Twitterなど様々な手段を活用し、警報や避難指示などの注意喚起をはじめ、電気・水道・ガス・通信・道路・交通などのライフライン情報まで県内の情報を手厚くお伝えしています。ライフライン情報は被災後、避難生活を送る人々に、もっとも必要な情報になって来ます。そこで、私たちは、ライフライン各社との連携を強化し、災害時にかかせない生活情報をいち早く正確に提供できる体制作りを行っています。

具体的には「逆L字」放送では、放送中の画面の左側および上部に青い帯を割り込んで、気象警報をはじめ避難に関する情報、ライフライン情報をきめ細かくお伝えしています。



逆L字

「データ放送」では必要な情報をいつでも簡単に得ることができます。インターネットが使えない年配の人の利用も多く、日ごろからニュースや気象情報などを活用していただいています。緊急災害時は、防災・生活情報のページで、各自治体から発表された「避難指示」「避

難勧告」などとともに、避難所の開設情報を市町村ごとにお伝えしています。また、河川水位・雨量のページでは、和歌山県下の河川に設置されている雨量観測所の観測データや、水位観測所の水位を色別に表示し、「氾濫危険水位」などをお知らせします。他にも、ライフラインに関する最新の情報や、交通情報などもお伝えしています。

NHK和歌山の「ホームページ」では、避難情報や被害情報、ライフライン情報など最新の情報を詳しくお伝えします。「Twitter」でも、避難情報、生活情報、ライフライン情報などをつぶやきます。また、各地から届いたTwitter情報は放送や取材に活用する場合もあり、電話が繋がらない時の有効な情報集取ツールとして活躍します。

2 連携

災害情報を確実に届けるためにNHKでは、電波を使っての情報発信だけでなく、自治体や、地元のコミュニティFM局と連携を強化しています。具体的には、自治体の防災行政無線で、NHKの非常災害ニュースを流す取り組みです。紀伊半島南端の串本町や那智勝浦町と協定を締結しましたが、この二つの町は巨大地震が起こった際、3、4分で津波の第一波が到達すると言われています。最大の波の高さは、共に18メートルです。市街地のほとんどは水没してしまいます。防災行政無線にはJアラートなどの情報が流れますが、何らかの影響で流れないことも想定し、役場の判断でNHKの非常災害ニュースを流すことができるようにしました。

地元コミュニティFM局4局とは、非常災害時に情報を提供する覚書を交わしました（FMわかやま、FMたなべ、FM白浜、FM橋本の4局）。NHKからニュースや生活情報を提供し、放送してもらう仕組みです。FM各社とは、日常的に協業し、いざという時に備えています。

3 番組

続いて、番組についてです。「あすのWA！」以外にも、防災に関する様々な特集番組を制作し、放送しています。まずは、「犠牲者“ゼロ”をめざして～巨大地震を生き抜く授業～」(2012年放送)という番組です。

東日本大震災の際、岩手県釜石市の子どもたちが、自分たちの判断で素早く避難し、大津波を生き抜きました。子どもたちの行動は“釜石の奇跡”と呼ばれています。そんな子どもたちを長年指導してきた群馬大学大学院の片田敏孝教授が和歌山市で講演しました。「津波の正しい備え方」や「地震直後、釜石の子らがどう行動したか」など、実際に起きた事に即してわかりやすく語った講演を特集しました。

続いて、「私たちがふるさとを守る～釜石で過ごした3日間～」です(2013年放送)。「津波がふるさとを襲ったとき、中学生に何ができるのか」。和歌山県田辺市立高雄中学校の2年生17人が、岩手県釜石市を訪ねました。そこで出会ったのは、同じ中学生がお年寄りや小さな子どもを助けながら高台を目指し、命を守り抜いた姿でした。「我が身を危険にさらしても他の人を助けたい」「体力のないお年寄りが避難できるような支えるには？」それぞれが答えを探して、釜石の街を歩いた3日間の記録です。この番組は英語版も制作し、NHKワールドで世界に向けても放送しました。

「防災シンポジウム ～巨大地震その時あなたは何かから情報を得る?～」(2016年放送)では、地震発生後の災害情報の大切さや、その情報をどんな手段で入手するかについて、災害の専門家や行政担当者、放送事業者が意見を交わしました。停電が続く被災地ではスマートホンのバッテリーが無くなれば、災害情報を入手することは難しくなります。乾電池で長時間稼働するラジオは災害時最も有効なアイテムとなります。携帯用のラジオをカバンに入れておくことは、簡単な災害への備えといえます。

普段使いのBOSA Iをテーマに「BOSA

I FASHION RUN-AWAY RUNWAY～楽しくそなえて 楽しくおでかけ～」(2017年放送)は、防災とファッションをコラボさせた番組です。防災に関心が低い若者をどう振り向かせるかを考えたイベントで、県内外から444点のアイデアが寄せられました。テーマは普段使える防災コート・ジャケットです。優秀作品9点を実際に製作し、ファッションショーを開催しました。日常生活の中に防災をどう取り込むかを考えました。普段やっていないことは災害時にはできません。逆に普段やっていることは災害時にもできます。ファッション以外にも生活の中に防災を取り入れることは簡単にできます。このほか、11月5日世界津波の日のFM特集などラジオでも多数放送しています。



防災ファッション

4 イベント

NHKでは、全国で放送している公開番組など、さまざまなイベントを実施していますが、和歌山放送局では独自に防災に関するイベントを行っています。イベントは、実際に体験し、考えることで、防災意識をより高めてもらえる内容となっています。そのひとつ「挑戦! NHK防災サバイバル」は、いざという時にとるべき行動を、1人でも多くの子どもに身につけてもらうための実践型避難訓練です。2013年から実施しており、これまでに県内1260人の小学6年生が、授業の一環として参加しました。内容は「制限時間60分以内に“防災”に

関する11のミッションをクリアしていく」というものです。「緊急地震速報が出たらどうするか」、「暗闇の中の行動」「ラジオからの情報入手」などのミッションを仲間と協力してクリアしていきます。このイベントのポイントは、「防災」に夢中になる仕組みです。防災という堅いテーマに「挑戦・謎解き」というゲームの要素を盛り込むことで、楽しく、本気になって学べるようになっていきます。子どもたちからは、「楽しかった」「覚えたことを家族に報告したい」「家族で防災について考えたい」などの感想が寄せられました。ラジオに電池を入れ、周波数を合わせることは、日常の生活では殆どしなくなりました。災害時に役に立つラジオの使い方を子どもたちに覚えてもらう、良いきっかけとなりました。



防災サバイバル

ラジオ体操・テレビ体操などを健康維持に行っている人も多いと思います。和歌山放送局ではオリジナルの「NHK BOSA I体操」をつくり普及させています。「NHK BOSA I体操」は、災害が起きたとき、1分、1秒でも早く避難する体力と筋力、そして命を守るという気力を持ってもらおうと作りました。体操は、高齢者や身体に障害がある人でも気軽に行えるよう、座ったままでもできます。頭を守って身の安全を確保したり、高台へ駆け上がって避難したりするイメージが動きの中に取り入れています。さらに手をつなぐ動作は、人

と人とのたすけあいの大切さを表現しています。2013年から各地で体操教室を開いており、これまでに3000人を超える人が参加しました。体操教室の様子は収録してミニ番組として放送しています。

2015年からは外国人向けのBOSA Iイベント「Let's Study BOSA I」を和歌山県国際交流協会などと開催しています。緊急地震速報や避難指示など災害時に使われる用語の紹介や説明、人工呼吸・AEDの使用方法、災害情報の入手方法、起震車で地震体験などのプログラムに取り組みます。これまでに200人が参加しました。進行は「やさしい日本語」です。災害時、テレビやラジオ、防災行政無線からの情報は日本語です。言葉の意味を理解し実際に避難など行動に移してもらうためです。定住外国人だけでなくインバウンドなど私たちの生活の中に外国人がいることは、今や「日常」となっています。外国人を災害から守ることも重要な取り組みです。



LSB

まとめ

南海トラフの巨大地震に備えることは、行政・企業は勿論のこと住民も待ったなしの状態です。放送やイベントを通じて最近感じることは、一部の住民の中に「他人事感」が見え隠れすることです。「すぐには来ない」「自分の地域は大丈夫」「いざとなったら行政が何とかしてくれる」など根拠のない理由で、災害への備えをしていない人が見受けられます。いざ災害が起きれば想像をはるかに超える被害が目の前に

現れます。東日本大震災を思い出してください。巨大な津波が沿岸部を襲い、建物をのみ込み破壊して、街・生活を全て奪いました。大きさではなくあの光景が実際のものになることは避けられません。「自分の命は自分で守る」今できる事を今やりましょう。水や食糧の備蓄、避難場所の確認、家族と連絡方法、住宅の耐震化などなど。NHKの放送やイベントだけで犠牲者がゼロになることはありません。私たちは他のメディア、ライフライン関係事業者、行政、教育機関などと連携し、その時に備えます。放送を継続するために放送機能も強化します。災害情報を被災地にきちんと届けるために訓練を重ねます。「他人事」から「自分事」に。災害への備えを進めましょう。